

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：33501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K04648

研究課題名(和文) 明治大正期における言語領域を中心とした幼児教育の意義の再検討

研究課題名(英文) Reexamination of the significance of the preschool education around the language education in the Meiji Taisho era period

研究代表者

鈴木 貴史 (Suzuki, Takashi)

帝京科学大学・教職センター・准教授

研究者番号：10588809

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代においても円滑に進まない幼保一元化問題について、おもに幼児教育における言語領域の意義を歴史的に探ることによりその解消を目指してきた。明治初期におけるフレーベル理論の受容について探り、日本語との相性がよくなかったこと、幼児が「喜んでする」ことを軽視していたことを確認した。また、わが国では明治10年代に恩物による文字教育から「読み方」「書き方」における系統的な文字教育へ移行していた。明治20年代の幼小の接続問題の一つには、幼稚園での「読み方」「書き方」において幼児の興味関心が軽視され、小学校以上の系統的な文字教育へ円滑に移行することができなかった点について確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまでフレーベルの注目されてこなかったフレーベルによる文字教育に注目し、恩物の意義を再検証したことに意義がある。

また、明治10年代から明治20年代にかけてフレーベルの文字教育論が正しく理解されず、接続期における「書き方」「読み方」が削除され、幼稚園と小学校の円滑な接続ができなかったことを確認したことに最大の意義があるといえる。

以上のように、本研究では言語教育における接続期が意識されなくなった時期として明治10年代から20年代の課題を抽出し、現代の幼小接続および幼保一元化問題に新たな視点を与えたことに社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study about the issue of integration of kindergartens and nursery schools not to advance smoothly in the present age either by investigating the significance of the language education in the kindergarten.

Floebel's literacy education theory emphasized that it should be based on children's interest by using the Floebel's Gift. But the educational focus shifted toward compulsory literacy skill in Japan. Later in Meiji 20's, the literacy education was lost on the curriculum of kindergarten in Tokyo Normal School for Females, which resulted in separation of kindergarten and elementary school in terms of literacy education.

研究分野：幼児教育

キーワード：言葉 幼保一元化 幼小接続 言語教育 フレーベル 幼児教育 文字教育

1. 研究開始当初の背景

本研究は、現代においても円滑に進まない幼保一元化問題について、幼保の二元化が成立した経緯を辿り、幼保一元化を阻んできたものは何かを歴史的に再検証することを目的としていた。本研究では開始当初、近代学校制度の成立以降、わが国においては幼児教育に対して正統な評価を与えられず、幼児教育を担う当事者からもこれに対する明確な反論がなされてこなかったのではないかという仮説を立てた。本研究では、幼児教育の意義を探るため、明治初期から 1926 (大正 15) 年の「幼稚園令」成立までに至るまでの幼児教育について、おもに言語に関する領域 (以下「言語領域」) に着目し、小学校との接続問題、託児機能の包摂問題と関連させることにより、幼保一元化を実現するための新たな視座を与えることを企図して研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究では、幼児教育の意義を明確にすることを目的として、保育の主要 5 領域の一つである言語に関する領域に着目し、小学校教育との接続問題と関連させながらその歴史を辿り、幼児教育の意義がいかんにして語られ、いかなる批判がなされてきたのかについて分析検討した。本研究では、期間内に明らかにしようとしていたのは、以下の二点である。

- (1) 幼児教育に関する理論書において「読み方」「書き方」など文字言語教育の意義と小学校との接続問題がいかんにして語られてきたのか。
- (2) 興隆する託児所に対して、いかなる幼稚園関係者の対抗・拒絶の意識が形成されてきたのか。こうして本研究は、現代における幼児教育の意義を提示して、新たな視座を与えることを通して幼保一元化をいっそう推進させる原動力となることを企図していた。

3. 研究の方法

本研究は、文献資料を中心とした歴史研究であり、幼保が二元化された背景を探るため幼児教育の意義について、言語領域に着目した。これを「幼稚園草創期 (明治 10 年代)」「幼稚園普及期 (明治 20 年代)」「幼稚園保育及設備規程」および「第三次小学校令」期 (明治 32 年から 40 年代)、「幼稚園令」制定過程期 (大正期) の四期に分けて検討する予定であった。それぞれに時代区分と研究期間を対応させ、4 年間で完了する予定であった。当時の代表的な保育理論および教育雑誌などから、言語領域に関する言説を分析し、当時の幼児教育批判または幼児教育を担う側からの反論について検証しながら幼児教育の意義を再検討することを試みた。

具体的に、明治学制期の主要な幼児教育論である桑田親吾『幼稚園』(1876)、関信三『幼稚園記』(1876)、『幼稚園法二十遊嬉』(1879)などを参照し、わが国に紹介されたフレーベル主義による恩物の一つである、「置箒法」に着目した。「置箒法」とは、短い棒片を用いて作図などを行うことであり、保育科目として使用される「木箒ノ置キ方」、「箒排へ」、「箒細工」などは、この「置箒法」とほぼ同じ作業を示す語句として捉えられる。本研究は、この「置箒法」とフレーベルの文字教育との比較検討を行いながら、言語領域に関するフレーベルの理論が翻訳された際、いかに受容されてきたのかについて検討する。フレーベルの文字教育論の特徴を確認し、その後、わが国の幼稚園における文字教育の受容過程の中でそれがいかんして変容していくのか確認した。1881 (明治 14) 年の東京女子師範学校附属幼稚園 (以下、「附属幼稚園」) の「附属幼稚園規則 (以下、「M14 幼稚園規則」)」における「読み方」、「書き方」の導入から 1891 (明治 24) 年の「附属幼稚園規則 (以下、「M24 幼稚園規則」)」におけるそれらの削除に至る時期について、当時の保育理論書や雑誌記事を参照した。

4. 研究成果

本研究は、現代においても円滑に進まない幼保一元化問題について、おもに幼児教育における言語領域の意義を歴史的に探ることによりその解消を目指してきた。

明治初期におけるフレーベル理論の受容について探り、その理論が日本語との相性がよくなかったこと、わが国では幼児が「喜んでする」ことが軽視されたことを確認した。また、明治 20 年代には幼稚園不要論に対抗すべく幼児の読み書き能力を重視した園もみられたが、ここでも

幼児が喜んで取り組むことが軽視され、小学校以降の系統的な学習との円滑な接続ができなかったことを確認した。

こうして本研究は、これまでフレーベルの注目されてこなかったフレーベルによる文字教育に注目し、恩物の意義を再検証したことに意義がある。また、明治 10 年代から明治 20 年代にかけてフレーベルの文字教育論が正しく理解されず、接続期における「書き方」「読み方」が削除され、幼稚園」と小学校の円滑な接続ができなかったことを確認したことに最大の意義があるといえる。

以上のように、本研究では言語教育における接続期が意識されなくなった時期として明治 10 年代から 20 年代の課題を抽出し、現代の幼小接続および幼保一元化問題に新たな視点を与えたことに社会的意義がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 鈴木貴史	4. 巻 第3巻第2号
2. 論文標題 幼稚園草創期における文字教育	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 帝京科学大学教育・教職研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木貴史	4. 巻 58巻2, 3合併号
2. 論文標題 明治20年代における幼小の接続問題 - 幼稚園における「読み方」「書き方」の存廃問題に着目して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保育学研究	6. 最初と最後の頁 155-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木貴史
2. 発表標題 明治20年代における幼小の接続問題
3. 学会等名 第72回日本保育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------